中国研究 の学術的手引書

近年、 わが国に 研究の基礎に着目し、

といった表現には、学問の道の厳

されるのである」(衝脈落言)

状眼を持つことがことざらに要求

野は、国際的にもきわめて高い 地にあるといってよいだろう。 なったがぞうした一般的状況のな とくに近現代中国研究の分 績が目立つように 野のすぐれた業 論や地域研究の分 おいても国際関係 ある。 学と文章」(前野直彬)「社会経 をモッ 済史一論文の出来るまで・一つの ための工具類」(市古里三) disciplinaryは中国研究への 全体の構成と製造者は「研究の 『タコツポ』意識の打破」 一にして編まれたもので finter 交

量がな肉輪である。

市当・フェアバンク共著の『

の回顧と展望」も、きわめて内容 有による巻末の座談会「中国研究 にはいられないであろう。全執筆 しさが滲み出ていて、襟を正さず

**火赎」(田中正牧)「政治外交**型 (坂野正高) 「政治外交史―辛亥 清末の根本資料を中心として」 近代中国研究入門

ア研究にまだまだ及ばないのは

しは、アメリカの中国研究・アジ より、研究の間の厚さという点

念である。その理由のひとつ

研究の場合、 学問的な質と 蓄積よ

わが国における近現代中国

りもイデオロギー的ないしは政治

衛縣器吉 坂野正高·田中正俊

な傾向性の方が先走ってしまい

国法」(漢件数)「現代の中國経 の法制」(滋賀秀三)「現代の山 革命以後」(南縣郡吉) 全東大田版会・一大C 門衛

ですいために、中国研究者の数は

きわめて多いものの学問的に国際 不明に建し得る研究者が、またま 済」(石川遊)となっており、そ れぞれの分野の中核的な専門研究

に限られていることにあろう。そ 内外の研究水準を広くフ

の点で、岩手研究者の養成は 課題であるともいえよう。 評価しつつ策を進めている。 ローし、それらを冷削かつ傾所に 者にとって、きわめて有益な文献 野省や中国に興味をもつ一般の跳 項目に整然と分類されており、研

条内である。

ら相次いで刊行されたこの二者 そのようなとき東大田版会が わが国アカデミズムの分野に 「中国研究文献案内」 以上のように、今日の時点での

正当出 ・K・フェアパンク No.

《東大田版会・二二〇〇円》 この二者の出版は、

学問的にも設

見の使い方、岭文の春き方の作法 な基礎的影響、および、質料や工 国研究人門とは、近現代中国研究 行されたことの形義は大きい。 の種の学術的な手引援がわが国に の学界とは例なって、これまでこ 引きとなるものである。アメリカ 学徒にとって、かけがえのない手 を反映した研究案内であるととも にかんし、「学問研究として必要 はなかっただけに、この二者が刊 に、これから中国研究を志す岩き おける最高水準の中国研究の成果 坂野、田中、衛藤編の『近代中 があろう」(田中正俊)とか「中 のであることを銘配しておく必要 書評は、無責任な否定や資辞によ 通った称密な再検討を飛でいない 知るだけでも意味があるが、たと って、脱者をあやまりかねないも のように問題に対処してきたかを 各種派者自身が研究者としてど 「その虫科の原則にまで

だといえよう。それだけに、 このような書を打てまことに学せ 研究を志ず者や若き学究たちは、 期的にも意義深く、これから中国

は意外に少ないのである。……中 いと言っても、東東を伝える資料 国現代政治史の資料は懸的には多 学的研究とはどういうものである かを、この三省は敬えてくれる。 今とけに、現代中国にかんする科 かく政治的効果を目指した政治論 ような便宜に甘えることのないよ ねばなるまい。 中国に関する論文というと、 算伝輸文めいたものが多い昨 すぐれた研究業績が配み出さ (中國御雄=東外大助教化) 500

古氏が、同言の「文献条内」にあ 者『合衆因と中国』(邦沢『中 四 東大田版会)を邦訳された市 大学の観学フェアバンク教授の名 国研究文献案内』は、ハーパード

うえに、 国とアメリカの関係」「〈附録〉 献が「一般参考図者」「中国の伝 ことに有益なコメントが付された 統文明」「中国の社会と文化 成ったものである。本書は、 『東洋史学』の開拓者だち」の各 「近代中国」「人民共和国」「由 なる文献リストではなく、各文献 国文文献を加筆し、ここに一書と る欧文文献に加えて、日本文・中 起大な軍の内外の研究文 言物人の

49,10.

中国研究の学術的手-1974.10.05 &

ことで叙述する」という、 など、終じてinstrumentalな

训究者

にとってもっとも用要な、それ